
ブラジャーをかぶりたい男

ジョンソン内田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラジャーをかぶりたい男

【Nコード】

N4265B

【作者名】

ジョンソン内田

【あらすじ】

短編ですので、短編らしい作品を書いていきたいです

田村ひろしは芸人になって8年目で、おしゃれな服装やおおげさなしゃべり方などが受け、ようやくテレビにもちょこちょこ出るようになった。今日はテレビのドッキリ企画が深夜に生放送であると言われ張り切っていた。なぜってホテルでシャワーを浴びるグラビア・アイドル吉田美砂の部屋に侵入するからだ。吉田の胸はかなり大きく、田村は大ファンだった。吉田美砂がシャワーを浴びにいった時に、吉田のマネージャー永井芹菜（同部屋に宿泊）が田村に連絡し、田村が部屋へ侵入する段取りとなっていた。しかも番組は15分拡大のスペシャル版で、田村はやる気満々だった。

田村はネット上で吉田美砂の名前をいくつも検索して、その映像や文章を発見してはあらぬ妄想をしていた。

（もしかかして今まで生きてきた中で一番嬉しいかもしれない）

田村は本番前の楽屋に、吉田美砂の写真を持ち込み、テンションを最高潮まであげようと計画していた。

ところが当日。どつきりはやらせで、ブラジャーは吉田美砂のものではないことがディレクターから田村に伝えられた。

「俺吉田美砂のブラかぶれないんすか？」

「かぶれるけど本物は用意してないよ。だってこれは生放送だよ。田村君。どつきりといっても打ち合わせしないとさ。なんかあったらまずいじゃん。美砂ちゃんとも打ち合わせ済みだからね。本物のブラではいよ」

「ですよね」田村ひろしは営業先と接待をするサラリーマンのような笑顔をディレクターに作った。緑色に染めた頭を掻くと爪が少し

伸びすぎていたのに気づいたので本番前に切ろうと思った。

しかし自分の楽屋に戻ると、田村はマネージャーの神山に八つ当たりした。

「なんだよ。お前今日は吉田美砂のブラジャーをかぶれるって言うてたじゃん。」

「いや、でも俺も今日聞いたんすよ」

神山は、かなり太っていて流れ出る汗をぬぐった。

「いやーテンション下がるわ、神山ちゃん。事前に言ってくんないとき。やる気出んよ。俺が握手会に行ったことがあんのだって知ってんだろ？」

「だから自分も」

神山が（自分も今日ディレクターに聞いた）と言おうとしたのを田村は遮った。

「デブちゃん。コーヒー買ってきて」

と小銭を渡し神山のお腹の肉をぐいぐい引っ張った。少し硬い感触がした。

「お前太りすぎじゃないの？」

と田村が言つと

「芸人のマネージャーは苦勞してるからみんなこんなもんっす。でもいつも田村さんが芸人根性を見せてくれるからありがたいつす。」

「うるせえよ。バカ。やる気しねえんだんよ。ブラが偽物じゃあよ。」

「
」
と言いながら、自動販売機へと向かう神山に、田村は背を向けゴロンと横になった。

田村は、神山とはじめて会った時こう言われた。

「私は太ってますが、逆にこれを合コンなんかで売りにして笑いを取ってます。田村さん。辛い状況こそおいしい状況に変えるチャンスですから。」

冬なのに神山は汗をかいていたが、田村もこの神山の言葉には今も共感している。

神山は人がいいので、田村の言うことはなんでも聞いてくれた

「無糖じゃねえよ！微糖つつただろ！」

田村はコーヒーのことぐらいで神山のことを怒鳴りつけたが、神山は文句一つ言わなかった。

それ以来、例えばゲテモノを食べる料理番組で田村が苦しむと、袖で神山が自分のお腹をぐいぐい引つ張った。それは芸人根性を見せろという田村へのサインになっていた。田村は本番で辛い思いをして、その後神山によく八つ当たりをした。神山は八つ当たりされることも仕事のひとつだと考えていた。

本番の時間が迫ってきている。田村は時計代わりに使っていた携帯を閉じた。

そしてため息をつきながらも、芸人としてのプロ根性を見せようと考えていた。

（これはおいしい状況のはずなんだ）

生放送だけに失敗は許されない。チャンスは一度だ。「どつきり」ではなく綿密に計画されている番組だが、それをいかに本当っぽくみせるかが俺の仕事だろう。芸人魂を見せてやろう、と田村は考えた。それに吉田美砂にも会えるわけだし。

「さあはじまりました！スタードッキリウルトラ計画復活祭！！生放送スペシャル！！」

テレビではけたたましい声で、大御所司会者が番組をスタートさせ

ていた。少し白髪の数が増えたようだった。

田村のいる場所はいわゆる「中継先」で、テレビ局内にあるスタジオでメインの収録が行われている。吉田美砂がシャワーへと向かった瞬間田村ひろしのいる現場の映像に切り替わるわけだ。担当ディレクターがA Dにせわしなく指示を出している。

田村が番組をテレビで確認していると「よかつたらこれ飲みなよ」とホカ弁のおばちゃんがわざわざお茶を持ってきてくれた。おばちゃんは背丈が140cmくらいしかなく、二カツと笑う姿が田村の母親とどこなく似ていた。田村は高校時代、茶髪にしたり原付きを乗り回したりして母親にはずいぶん迷惑を掛けた。

（母ちゃん。俺は女性のブラジャーをかぶって喜び叫びます。しかも偽物です。でも仕事なので頑張ります。バカ息子を見守ってください）

田村はそんなことを滋賀にいる母親に懺悔しながら、テンションを上げる意味でもバカでかい声でおばちゃんに礼を言った。

「おばちゃんありがとな。」

おばちゃんは少しびっくりしていたが「あいよ」とだけ言って笑った。

「それじゃありハールサルやってみよう」

ディレクターに促されて、田村ひろしは吉田美砂の部屋へと向かった。

まず鍵は吉田美砂を起こさないようにゆっくりと開ける。飲みかけのペットボトルのお茶をおいしそうに飲む。洗面所の歯磨きで自分の歯を磨く。ひとつずつ田村は段取りを確認していった。メインの浴室の前で、田村は呼吸を整えた。（ここが一番の盛り上げ所だ）。

しかし田村ひろしが浴室のドアを開け目にしたのは、まったくの見知らぬ男だった。しかも部屋の中は変な匂いがした。臭いのだ。浴室に吉田美砂はいないようだった。

「あなた誰ですか？」田村ひろしが恐る恐る尋ねると

「よ・よし・吉田美砂がここに泊まってるって聞いたから。」

うるたえ、どもりながら男は話した。なぜか全裸の上に吉田美砂のものとして用意されていたブラジャーとパンツをはいていた。男からは排泄物のような匂いがした。でも田村はこの臭い男をどこかで見たような気がした。

「お前何やってんの？」

後ろからディレクターが少し強い口調で迫ると、ブラジャー男は洗面所に置いてあったナイフを手にした。そして突然叫びだした。

「俺に近づくんじゃねえ！ぶっ殺すぞ」

その場にいた誰もがヤバイ男だということをすぐに認識した。男は何日は髭を剃っていないような顔をしていた。周りの人間はあまりの臭さに鼻をつまんだ。

（どこであつたんだろう）田村は考え込んでいた。

「あのさあ。これから撮影があるから、とりあえずここから出てほしいんだけど。」

ディレクターは丁重に言ったが

「う、うるせい。どうせ警察に突き出すんだろ。吉田美砂はまだいねえのかよ。でもこのブラを持ち帰れば、俺は本望だ。死んでもいい。警察なんか恐くねえぞ。」

「そ、それはまずいから。あんた本当の本当の吉田美砂のファンな

「んだろ？」

「当たり前だ！！俺様を誰だと思ってる。吉田美砂のファンはテレビとかラジオに出る前からやってんだぞコノヤロー！」

「だったら、これわかるだろ？」

田村はジャンバーのポケットからカードを取り出した。自分の宝物を出す少年のように。

「そ、それは」

ブラジャー男はナイフを洗面所のところに置いた。何度も目をパチパチとさせた。

「幻となったデビュー前の吉田美砂トレカじゃないか！」

「そうだ」

「お前もそうなのか？」

田村は大きく頷いた。

「この価値をお前ならわかるはずだ。今から生放送で番組が始まってしまう。このトレカは惜しいがお前にやる。だから」

「わかった」

男は即答して、ナイフを田村に渡し、吉田美砂のものとして用意されていた下着を外して部屋の外へ出た。周りにいた人間にとって、ナイフを持った男の臭さは半端なものではなく、もはやトイレの便座とおなじような存在だった。だが、田村は同じ吉田美砂ファンとしてある種の通ずるものを感じた。

「それでは中継先の田村君を呼んでみましょう。田村くん！！」
スタジオから中継先の田村が呼ばれる。田村はイヤホンに手をあてた

「はいはい。こちら田村です。私は今超人気のグラビアアイドル吉田美砂の宿泊先のホテルの部屋にいます。」田村はわざと荒い鼻息を立てた。吉田美砂も浴室に入り準備を始めていた。部屋はまだ

ナイフ男の匂いが残っていて、ブラジャーにはその匂いが染み付いていた。

次に田村は予定通り吉田美砂を起こさないようにゆっくりとドアを開け、飲みかけのペットボトルのお茶を飲み、洗面所の歯磨きで自分の歯を磨いた。田村は深夜番組ということをふまえて、自分を壊せるだけ壊した。テンションも上げまくった。

「テレビの前みなさん見てください！！吉田美砂のブラジャーがありますよ！！」

田村は興奮してレポートしたが、異常なまでの臭さに鼻が折れ曲がりそうだった。

「ブラジャーかぶっちゃってもいいですか！！」

田村は満面の笑みでカメラを見つめた。スタジオからは女性ゲストのブーイングが聞こえる。

（なんだ、この臭さは生ごみと同じような匂いがする）

「いやー最高ですね。私ずーっとずっとファンだったんですよ。生きててよかったー」

田村はついにブラジャーを顔にかぶった。

これは本当に田村が夢みていた光景だった。どれだけ非難されようとも仕事を忘れて至福の時を味わえるはずだった。

でも本当に臭かった。ブラジャーはもはやブラジャーではなかったのだ。田村が思わず吐きそうな顔になった時、マネージャーの神山が自分のお腹の肉をぐいぐい引っ張って合図を出していた。

「最高です！！私の長年の夢が叶いました！！」

（く、臭い。マジで臭い）

「変態と呼ばれてもかまいません！ブラジャー最高！イヤッホウ！

「！！！」

（鼻が取れる。きつと取れる。変な方向に折れ曲がっているはずだ。あー臭い。本当くせえ）

芸人にとって「おいしい」とは一体なんなのだろうか、と田村の心にふと浮かんだ。

それでもこれはおいしい状況なんだ、と田村は自分に言い聞かせ、テンションを上げ、自分を壊せるだけ壊した。

田村はこの時点であの臭かった男の正体がわかっていた。

吉田美砂の握手会に行った時に、「俺はありのままで勝負する！！」と言って、何日も風呂に入っていないような臭い男がやってきていた。何日も風呂に入らず、周りにいる人間に吐き気を催させるような強烈な匂いを漂わせながら、吉田美砂と握手することを希望した。

もちろんその男は吉田美砂との握手は許されず、会場から強制退場となった。

その時の会場の臭さを田村は今でも強烈に覚えていた。

それは今日ブラジャーを勝手につけていたあの男の匂いと同じものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4265b/>

ブラジャーをかぶりたい男

2010年12月2日02時53分発行